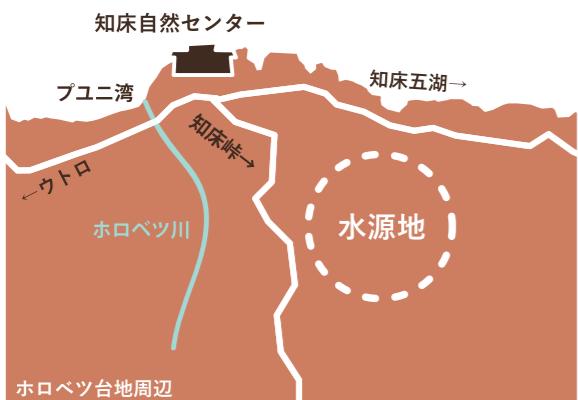


知床自然センター 水源地管理

文：普及企画係 戸田実琴



私たちは春と秋の年に二回、施設管理業務として水源地の維持管理のための点検と清掃を、地元の専門業者の方と一緒に行っています。普段何気なく使っている知床自然センターの水ですが、この水には開拓時代の人々の逞しい暮らしの歴史が詰まっているのです。

今回はそんな知られざる私たちの水源地維持管理活動についてご紹介します。

『知床開拓スピリット』（著・梅嶺レイ）にて語られるその水は、今も知床自然センターの水道へと繋がっています。

「甘くて、
冷たくて、
それはいい水だった」



こんこん
原生林の中に滾々と湧き出る水源。羅臼岳山麓、標高300メートル程の地点の沢に突如現れた水槽は、約70年前にこの地に入植者が発見してから、改良と管理が続けられてきた。この水源の水は、道管を通り、約3km離れた知床自然センターへと届けられる。

知床の森に水道を引く

大正三年頃から昭和四十年代にかけて知床半島へ入植した人々は、水を得ることに非常に苦労しましたと言われています。知床は知床連山の噴火によってできた火山礫の大だ。地面の表層に僅かに出来た薄い土壤では井戸を掘ることが出来ず、山林に豊富に流れている川の水も火山成分の酸性が強い為、生活用水として使うことは困難だったので。ホロベツ台地に入植した人々は毎日ホロベツ川まで崖を降りて水を汲んでいました。当時はブニ湾沿いの道路は無く、崖を登り降りしての水汲みは大変な労力でした。

そして、今から約七十年前の昭和三十一年、人々は水道を引く事を決意し、水道に使うための綺麗な水源を探しに、深い原生林の中分け入ったのです。

その時に発見された水源の水は、入植者が利用した当時のまま今も知床自然センターへと運ばれ、ビジターや私たちスタッフが利用しています。

道なき「道」を行く

水源地への道は、知床自然センターから知床峠へと向かう知床横断道路の途中から始まります。道と言つても、林道や作業道があるわけではありません。入口には背丈ほどのササが壁のように立ちます。森に入る事が出来ただけであります。森に入る事が出来そうな場所を見つけ、倒木に足を取りられそうになりながら進んでいました。

森の中では、林床をかき分けて進む経験者のスタッフについていくだけで精一杯です。ヒグマ避けの声出しや緊張感を高める中で、登山地図もGPSも持っていない開拓当時の人々はどうやってこの「道」を歩いたのだろうと、当時の人々の逞しさに感服せざるを得ませんでした。

知床自然センターの水源地

森に入り標高百メートルほど登った地点から尾根を越えて沢の斜面を降りていくと、急に水の音が聞こえできます。



鬱蒼とした森の中に水源と水槽が現れる。水量が多いため、調節しながら水道に水を送る。



森の中には歩きやすく平坦な場所もあり、そこが開拓当時に作られた道だと分かる。



崖を降り、川を越える水源地への道。開拓当時の人々がこの道を水源を探したのだろうか。

水源地での作業

大きな岩が積み重なる沢沿いに、埋もれるようにコンクリート造りの水槽が顔を出していました。上部の蓋板や、円柱型の水槽のサビ付いた蓋が長年の歴史を感じさせます。

道ですが、実は水源地から繋がる水道の終点がこの蛇口なのです。森の中から繋がる開拓時代からの水源。枯れることのないその水は、知床に残っている開拓の遺物のうち現役で利用されている物のひとつです。

水槽や蓋板に破損がないことを確認したら、清掃に取り掛かります。デッキブラシやザルを使用しての清掃は、雪解けの沢水で手がかかるほど大変でした。かじかみ、想像以上に大変でした。知床の開拓地跡では、家屋や当時の道具が朽ちかけたまま残つているのを見る事がありますが、この水源地は私たちが維持管理を行うことで今も現役です。先人たちの知恵と苦悩が今もこの水の流れのように、脈々と受け継がれていました。

皆様も知床自然センターで水道を使う時、その水源を発見したい開拓時代の人々の生き様を思い描いていただければと思います。

水道の点検

水源地から続く水道管に破損や腐食がないかを点検する。水道管は基本的に地面の中にあるが、地上に出ている部分も。



川の上に橋のように渡された水道管。故障箇所が無いかを確認する。

水槽の清掃

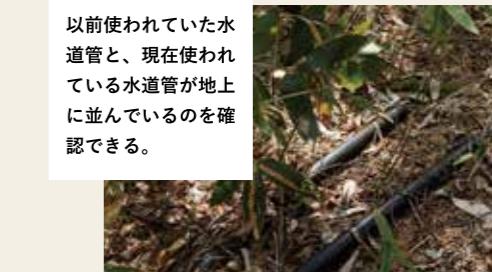
水槽の蓋を外し、苔や枯葉等をデッキブラシで落とす。水槽のなかにはカラマツの葉などが入り込んでいるため、ザルですくって取る。



釘で固定されている板一枚ずつ外し、汚れを落としていく。



大人の全身が入る程の水槽。水を抜きながら掃除をする。



以前使われていた水道管と、現在使われている水道管が地上に並んでいるのを確認できる。

活動日記 知床財団



知床財団のスタッフは普段どんな仕事をしているの?
あまり知られていない日々の取り組みをご紹介します。



◀トークを聞くことを主目的にバスに乗車するお客様もいらっしゃいました。

初試行!ヒグマ対策レンジャートークバス

カムイワッカ協議会主催で9月30日～10月2日までの3日間行われた、「Shiretoko Autumn Bus Days 2022」で、岩尾別温泉行のバスにヒグマ対策スタッフが乗車し、知床のヒグマについてガイドする初の試みを行いました。

利用者の方からは、「勉強になった」「面白かった」などの嬉しい感想をたくさんいただき、シャトルバスの魅力向上の一端を担うことができたと思っています。また、この路線は他路線に比べて利用者が少人数であったことから、会話のような形でガイドすることができ、普段一般の利用者と直接話す機会の少ないヒグマ対策スタッフにとっても、一般の方のヒグマに対する知識や印象を知る貴重な経験になりました。



森林再生事業「苗木の生産」

苗畑に植えたオオヤマザクラの種が順調に芽吹いています。この種は昨年、ヒグマの誘引を避けるため、フレペの遊歩道から除去したサクランボをシカ柵コースの苗畑に植えつけたものです。苗木として立派に育ったあとは、2027年の斜里町の植樹祭で柵外に植え直す予定です。その間、日照りの時は水をやり、雑草に埋もれた時は除草を行い、少しだけ生長の手助けをします。時には、害虫や晩霜など自然の営みによる禍もありますが、苗木はその年の状況や気候に応じて年々生長するはずです。苗畑はこれから雪に閉ざされます。まだか細いオオヤマザクラの様子を見ると少し心配になりますが、無事に越冬することを願いつつ、春の芽吹きを楽しみに待ちたいと思います。



発芽したサクラ▶

かつて開拓者が引いた
山深い水源地

知床100平方メートル運動ハウスの前に、石が組まれた小さな水道があります。夏場はここで手を洗うビジターもいらっしゃる水



参考・引用文献
・梅嶺レイ『知床開拓スピリット』柏艶社
引用P 66